
伝文

日本口承文芸学会 会報

【伝文】 第42号 2008年2月

〒214-0014

神奈川県川崎市多摩区登戸 3460-1

パークホームズ704

小澤昔ばなし研究所

Tel:044-931-2080

口承文芸研究の未来のために

石井正己

日本口承文芸学会の発足30年を記念する事業として企画した「ことばの世界」は、この2月で全4巻が完結することになる。第1巻の「つたえる」を総論として、第2巻「かたる」、第3巻「はなす」、第4巻「うたう」を各論とする。配本は、読者の親しみやすさを優先して、第4巻から第1巻へ遡る順序にした。各巻には長短28編の文章を収めたので、合計112編の文章を載せている。執筆者はすべて会員であるが、結局、3分の1ほど方々にお願ひできたことになる。

周囲の学会が行っている記念事業を見ると、論文集の発刊があるが、現在の出版状況ではそれもなかなか難しい。仮に刊行できたにしても、高価な論文集は発行部数も少なく、関係者の身辺で購入する程度に限られる。そうでなくても、研究者の専門が狭くなる状況で、そうした出版を行えばさらなる悪循環に陥り、学問はますます疲弊してゆく。そこで、今回は、この学問を社会に開いてゆきたいと考え、口承文芸研究の成果を理解してもらうような企画を考えた。平易な言葉を使って、デス・マス体で書くことをお願いしたのも、そうした理念と深く関係している。

そうしたときに大きな障害になったのが、皮肉なことに、「口承文芸」という言葉そのものだった。この学会の生命線とも言える言葉であるが、辞典類は「口承文学」であって、決して社会に流通する言葉ではない。そうした時に、「口承文芸」を研究仲間に関じこめる言葉にするのではなく、誰もが関心を持てるようにできないかという願ひがあった。各巻を「つたえる」「かたる」「はなす」「うたう」という言語行為を表す動詞で命名したのも、閉塞的な状況を変えてゆきたいと考えたからに他ならない。

今、完結しようとしている4巻を見わたしてみると、口承文芸研究の現在がくっきりと刻印されていることに気がつく。この成果は、先人から受け継がれた学会30年の達成であるとともに、ここまでしかできなかった限界でもあるように思われる。年度内の毎月刊行を優先したために、索引を断念したことも、ここに記しておかねばならない。悲願の「口承文芸大辞典」発刊はなお夢の彼方だが、この学問の未来を考えるならば、諦めるわけにはいかない。この刊行が契機になって、国内はもとより、世界に向けてさわやかな風が吹き始めることを願ってやまない。

(30周年準備委員会委員長・東京都)

第53回研究例会「アイヌ・女性・口承文芸」

2007年10月20日(土)14:00-17:00

会場 東京学芸大学 S103教室

萩中美枝先生の基調報告を聞いて

志賀 雪湖

例会案内に萩中先生のお名前を見つけ、はるばる札幌から東京へいらっしやると知り出席した。

先生は、アイヌ口承文芸に関わる者のみならず、アイヌの人々にとっても大きな存在である。1960年代から研究されてきたことは、『アイヌ文化への招待—女性と口承文芸—』(2007 三弥井書店)に詳しい。その長い研究過程に多くのアイヌの人々との交流があり、そこから先生ならではの研究が生れた。公演の際に必ずといっていいほど夫、知里真志保氏のことを話される姿には、氏から渡されたバトンの重みと研究の出発点を忘れない凜とした心が感じられる。

基調報告では語りの男女差について述べられた。

金田一京助、久保寺逸彦両氏が男性の語りを記録しなかったわけではないが、結果的には女性のもがたくさん残った。当時、両氏が記録した日高地方は男性の語り手が少なくなっていた。そういった状況のなか先生が道東の八重九朗 ekasi(翁)の語りを記録されたことは一筋の光明であった。そこから語りの地域差や男女差に着目した研究が生れたのだから。

この50年、アイヌの口承文芸をとりまく状況は一定ではなかった。「人が集まれば一人二人は yukar(英雄叙事詩)を語る人がいた」とおっしゃる時代から、語る人が段々と少なくなっていく時代を経て、今現在、音声資料を頼りに覚えて語る人達が出てきた。男女の語りの差に注目した先生の研究は、これからの語り手たちの重要な指針となるであろう。

「uwepeker(散文説話)は女性の方が得意で、くだけた感じだった」ともおっしゃっていた。女性の語りばかり聞いては実感できない感覚である。

久保寺逸彦氏が語り手による語り口の違いについて、『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』(1977 岩波)に若干の感想を書いているが、そこには男女差という視点はない。今後は、語り手それぞれの語り口の分析は言うまでもなく、多角的に地方差、男女差、時代の変化、語りの場、語りの制約等々を把握する目を持ちつつ、全体を見渡す目も持つべきだと教えられた。

最後になるが、pewtanke(危急の叫び)をするときは男でも女の声(甲高い声)が出せないと神に届かないのだそうだ。「神は女の声に振り向く」という先生のお話の向こうには多くの語り手との語りがあり、まだまだ書いておられないことが沢山ありそうだ。例会案内の要旨にあった、沙流郡二風谷の貝沢トロンノさんが語った物語の内容や形式について、詳しくお聞きすることができず残念であったが、また教えていただく機会もあろう。数年前の大怪我から奇跡の復活をとげられたのだから。(千葉県)

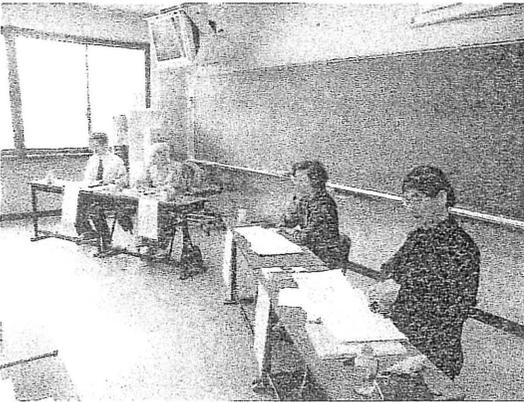
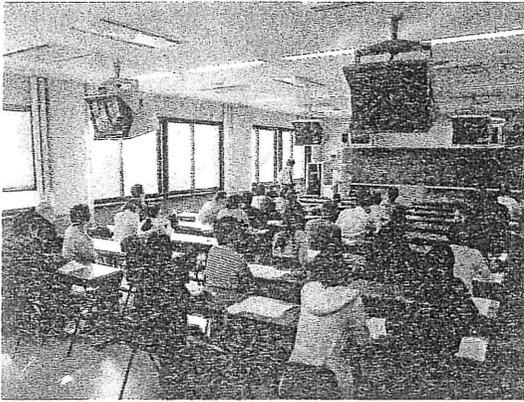
シンポジウム

石井正己

後半は荻原真子さん、藤井貞和さんに加わっていただき、4人のシンポジウムになった。荻原さんは神謡 Kamui-yukar を取り上げて、女性の語り手と伝承内容を問題にし、藤井さんは聖伝 Oina を取り上げて、神話の構造と叙述を分析した。打ち合わせもなかったが、おふたりとも久保寺逸彦の『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』に依拠した立論であった。久保寺は会場校になった東京学芸大学で国語学を教えていたことを思えば、不思議な因縁であった。議論は多岐にわたって、単純な整理は難しいが、大きくは、テーマとした「アイヌ」「女性」「口承文芸」の間で揺らいだ。私のまとめる力が不足していたが、参加者の間で問題の共有ができたかと思われる。それにしても、今、改めて思うのは、「アイヌ」を視野に入れない「女性」や「口承文芸」の研究に豊かな実りは期待できない、ということだ。やはり、ここでもまた、「私たちも自分たちの課題としてアイヌに学ぼう」と

いう最後の言葉を繰り返しておきたい。

(東京都)



各地からの報告「千葉県の民話伝承活動」

落合 奈央

2006年の夏から、千葉県各地で民話に親しむ催しが開催されている。県の委託事業という形で、昨年度は、市川市、船橋市を中心とした「下総民話のひろば」が開催され、今年度はこの活動を受ける形で「みんなでつくろうちば文化民話駅伝 in ちば」が現在進行中だ。

「下総民話のひろば」では、民話とは何か、語りとは何かを講演会形式で学ぶ【学習会】と、民話を聴いて語って楽しむ【語りの会】が、それぞれ数回開かれた。このうち目を惹いたのは、「子どもかたりべ【体験教室】」である。市川市・船橋市在住の小中学生を対象に、民話を覚えて語ることを目標とした連続講座とその合同発表

会が開かれた。

2007年の秋から開催されている「民話駅伝 in ちば」は、県内12の市町で活動する【語りの会】により、リレー形式で行われている。民話として地域に残る話を、語り・紙芝居・人形劇で紹介している。11月11日には、第3走者「船橋の民話をさく会」主催の催しが、船橋市の宮本公民館で開かれた。多くの中高年の参加者に混じり、子連れの若い母親の姿も見られ、身を乗り出して聴き入る子どもの姿もあった。「語り」4部に「紙芝居」と「人形劇」が加わった、6部構成の会である。「語り」の部では、市川・船橋を中心に広く残されている、おどけ者「じゅえむ」の話が、瓢採りや縄うち・縄ないといった少し昔の生活に触れつつ、語られた。また、今回は、語り手が、中山と古和釜に住む知人から「本当にあったこと」として聴いた話も披露された。化かすキツネが出るという木下街道をタクシーで走りながらの体験談が、キツネに荷物を盗られまいと必死であった体験者の気持ちと共に話されるなど、〈昔話の語り〉とは異なる魅力が光っていた。この他、松谷みよ子氏の作品『お月さんももいろ』が、節をつけた歌とともに披露され、また、前走者である野田市の語り手により野田の話も語られた。合間には、船橋市の海老川を舞台にした紙芝居が会場を沸かせ、最後は再び「じゅえむ」の話が、今度は人形劇で演じられ、会は大盛況のうちにしめくられた。

今年の3月9日には、駅伝の終着地、青葉の森公園芸術文化ホールで「ちば民話フェスティバル」が開かれる。どのような催しとなるか、楽しみである。(東京都)

前号の訂正 前号3頁・研究例会報告における山田巖子氏の発表題に誤りがありました。訂正させていただきます。申し訳ございませんでした。正しくは以下のとおりです。

○「試される母」—近代における異常出生譚の受容と展開—

○第55回例会のご案内

2008年3月8日(土)午後2時から5時

場所 東海学園大学 名古屋キャンパス 4号館2階428教室

テーマ「語りと伝説—三河の浄瑠璃姫伝承—」

前半 基調講演

文楽「浄瑠璃姫物語」の復刻にむけて

岡崎呉服協同組合理事長 加藤善啓

後半 シンポジウム

「浄瑠璃姫伝説をめぐる唱導」京都精華大学 堤 邦彦

「浄瑠璃姫物語—絵巻と伝承をめぐる—」早稲田大学 深谷 大

司会 東海学園大学 小林幸夫

問合せ：東海学園大学人文学部 小林幸夫研究室

名古屋市天白区中平2丁目901番地 電話052-801-1201

○受贈本(2007年10月から2008年1月まで)

『世間話研究』9号から16号・17号(世間話研究会)

『アイヌ文化への招待—女性と口承文芸』『シリーズことばの世界4・3・2』(三弥井書店)

『民具マンスリー』第40巻4号から8号・9号・10号(神奈川大学日本常民文化研究所)

『国文学 解釈と鑑賞919 特集 折口信夫と柳田国男』(至文堂)

★ 本学会創立三〇周年記念事業の一環、「シリーズことばの世界」全4巻の刊行が始まりました。すでにお手元に会員予約のご案内が届いたかと思います。ぜひ、ご一読下さい。

日本口承文芸学会編「シリーズことばの世界」(全4巻/三弥井書店)発刊

第1巻「つたえる」 I 口承文芸の方法 II 世界の口承文芸 III 口承文芸とその周辺

第2巻「かたる」 I 昔話と語り物 II 昔話の姿と語り手 III 世界の昔話と語り手

第3巻「はなす」 I 伝説 II 世間話 III 現代伝説

第4巻「うたう」 I 民謡 II なぞとことわざ III ことば遊び

[第4巻・2007年11月/第3巻・2007年12月/第2巻・2008年1月/第1巻2008年2月/刊行]

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい。

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局に連絡をするか、学会HP (<http://ko-sho.org/>) から用紙を取り込んでください。

入会金 1000円、年会費 4000円です。

郵便振替口座 00180-4-44864 をご利用下さい。
